



*はじめに・「ではのかみ」
 や「人まねにはざる」……1
 *「弥生自然体験型跡地」
 観察会の報告……2
 *「第27回東北自然保護
 の集いの報告」……4
 *第133回写真展「私の岩
 木山」の報告……8
 *「弥生自然体験型跡地」
 の活用法を考える住民集会
 の報告……9
 *特別展示「岩木山の野鳥」
 展開催の案内……10
 *「遺伝子組み換え植物の」
 恐怖・自然保護の視点から
 考えるつどい」の案内……10
 *事務局から
 *編集後記……1000

岩木山の東面・小杉沢へ
 行く途中にある溜池……

岩木山の山麓にはたくさんの溜池が存在する。北麓の長平や建石地区にはとりわけ多い。そこに溜まった水を利用して、岩木山は「農業地・水神さま」なのである。ところで山麓下部に広がる水田は年々道路、宅地、工業団地となり少なくなっている。当然多くの溜池は整備されなま放置され、沈殿した土石があふれ出る寸前の弥生跡地の「調整池」と同じ運命をたどることは想像に難くない。岩木山を護ることは「観光」よりも農業を護り育てることと密接な関係にあるとおもうのだが…。



土石があふれ出る寸前の弥生跡地「調整池」

…はじめに…

||「ではのかみ」や「人まね
にはざる」||

[illegible]

「弥生跡地に森林の復元を」との声が聞こえる。このような時はこうした。「あそこにはこういう事例がある」としたり顔で言う人がいるだろう。しかし、そういう前に「弥生跡地」と呼ばれないようになる前の自然を、岩木山の自然を理解しなければいけない。そのためにはスキー場を計画した時に実施したアセス結果を参考にすればいいのだが、残念ながらアセスはまったく不備、使用物にすぎない。でも、残念ながらも一歩進んだアセスをしたので現在あるかどうかとも知れない。やはり完璧なアセスをするのも現行の「岩木山についての学習と観察・調査」が先決であり重要だ。本会が「弥生跡地」の観察や見学に取り組み意味は「：ではない」には「ない岩木山を自分の目で確かめることにある」。観察は理解の出発点(原点)であるからだ。それにしては「弥生跡地」観察会への会員の参加は少ない。

注：「人まねにはさる」とは筆者の造語

A black and white photograph of a flowering plant, possibly a shrub or small tree. The plant has dense, dark foliage with many small, light-colored flowers. The flowers are small and appear to be in clusters. The background is dark and out of focus.

陸奥新報記者が途中まで同

行取材をした。

觀察に入る前に一岩木山を

考える会」の提案する会後一

地「をとるかにいして重
務司長が税月をこ。

第一局長が説明をした。実施。

第二は人工的な要素を極力省

「里山」としての自然の可

復た、その基本は、

「自然の回復力」を重視し、

本来の植生を大切にするこ

である。

第三は「里山としての自然の

回復」を図る時には「岩木山

の景觀的美しさは異物のない

山麓にある」を基本にすえろ

ことである。弘前から見える

この「岩木山東麓」は先人が

愛でることに残してくたさ

台癒力を考へし、草木復元こ

六。治癒方を考へたに、糸村復元は

Mitigation

「現状を守る」

立つてゐる。

...

出すのではなく出来るだけ現状維

に餌場となるエリア全体の自然維

全体を復元できる施策を行う。

ブナ植樹など兵庫県のブナ種苗

には違ふものに変化させてしま

トハキなど本来この場にな

それがあるやうな
ところ。――

の外来種である花を確認した

2



基本は自然回復力の手助けをすることであり、総て人間が手を加えることではない、あくまでも今ある自然を守ることが第一義なのである。

上部の工事用道路沿いに観察を開始した。

「隣接する昔からの雑木林（ミズナラ、コナラ、イタヤカエデなどが茂っている）の中にも入り、林の中の気温差から「木



上・ハルシヤ
ギク（北アメ
リカ原産）
下・オオキン
ケイギク（北
アメリカ原
産）
左・オオミツ
バハンゴンソ
ウ（北アメリ
カ原産）



の生えている場所」と「そうでない跡地」との微気象の違い（森や林のありがたさ）を実体験した。また、跡地の中央部分まで低木やススキなどをくぐり抜けて入った。跡地のブルトナーで表土をはぎとられた部分の植生と剥ぎ取られた泥土や岩が集積された場所の植生の違いなども観察した。この「跡地」が扇状地で伏流水がところどころで少量だが湧き出している。その小さな沢も埋められたり、そがれたりしている。そこには水がしみ出していてエゾミソハギが咲いていた。さらにその「工事用の道路」沿いに十数年前に植樹された「松」の成長具合も見たが、数本しか生き残っていない。あるものも成長がすごく遅いことにも注目した。また、隣接する「いこいの広場」敷地内に植樹されたブナの成長度合いと跡地に実生のから生育したハシロキなどの成長度合いにあまりの違い（ブナの成長が極端に遅い）に驚いた。この植樹された「ブナ」が岩木山のものでなければこれだけで「遺伝子的な攪乱」の要因になる。植えた人は誰か。どこから持ってきた苗木なのか。場所によって「工事用の道路」の洗掘による崩壊・崩落状況も観察した。場所以よっては深く穿たれて使用不能。加えて道路沿いには不法投棄のゴミが散乱していた。

不法投棄のゴミ

(跡地)の下方には、調整池(溜池)と呼ばれるものがある。これは、弥生時代の自然体(型)の掘削施設に予定計画(型)は、ピット・ブに活用される。場所であった。土が縁近くで50cm以上、泥土が中央部では数メートルに上る。水深は、すつかり浅く、水が流れ込んでいる。常で、ヤナギやチハナキが堆積泥土に生えて、半島ノキが形成している。もし、土石が流れて、運ばれる。泥土、岩石も下流に運ばれる。恐ろしい。荒れた土地の指標である。バツタがたくさん生息している。

て観察地が「荒らされた土地・表土がはがされたり、碎石が敷かれたり、木々が伐採された場所」であることを示していた。なお、本会長阿部東氏が数日前に観察地数カ所に昆虫採集用トラップを数基、小動物用採集トラップを数基を設置しておいた。残念ながら、この数日の「好天」で乾燥がはげしくどちらの木の残骸も、今回いるところでは、立派な「里山」なのである。樹木はおおむね、今回の観察会には60人の市会議員に文書を送付して参加をお願いした。その後は、弥生地区自然体験型拠点施設建設予定計画「問題がそこには、重要な懸案事項（大方の計画実施賛成が全員計画実施反対に変わった）であるだろうと考え、現状の実態をしっかりと観察した上で検討してほしい」と思ったからである。つかり、本会の要望にこたえて午前10時に4人の市会議員が参加して、午後1時に市会議員に「他の方も来てくれませんか。」とたずねると「賛成と言っていたのに（市長が替わり）反対にまわったから（顔をあわせたのが）都合が悪くて来れないのでしょう。」と言っていた。おかしな話だ。それ以外にもよく参加し、まじめに質問などしてくれ、他の参加者と同様に心から感謝する。これからの問題もこの問題を協力して解決していきたいと考えているところである。

なお、この観察会をつうじて、本会に入会した方が数名いる。岩木山を愛し、いつまでもあるがままの姿で残していくために一緒に活動をしていきたい。

9月23日の実施について 二ホンザリガニの生息を確認

「跡地」には流水のある沢が2本と伏流で確認され、下部で湧き出したり、しみ出ている沢が数本ある。その中の一本は二ホンザリガニの成体という一匹、幼体を一匹捕獲した。この二匹は約50cm四方という狭い範囲に生息していたもので、森林が伐採されて表土をはがされた「跡地」の沢で生き延びてきた理由はない。きれいな湧水が流れるところ・水温が20℃以上にならないこと・巣穴となる土や砂が沢縁に貯まることなど、森林が残っていることを考えると、特定の森林の自然回復が森に残っていること、この沢の周囲の森林の自然回復が

発見され捕獲されたザリガニ（体色は茶褐色・確認後に返した）



比較的早く日陰を作ったこと（近くに植樹されたブナは2mにもなっていない）、跡地のこの部分は野生のハンノキなどがすでに7、9mに成長している。などであろう。

二ホンザリガニは日本の特産種で北海道・東北地方北部（青森・秋田・岩手各県の一部）にしかいない。秋田・岩手各県はほんの一部であり、青森県も津軽半島の山岳域、岩木山など限られている。

：の報告

本会が事務局団体として支えた第27回「東北自然保護の集い・岩木山大会」（大会テーマ：水辺の保全と自然林の再生）」

大会の概要と感想
開会に際しては、来賓として弘前相馬市長（代理・高畑幸助役）から歓迎の挨拶もあった。記念講演は本会長阿部東氏の「岩木山の自然から一種の多様性と保全」である。大会の「水辺の保全と自然林の再生」にそった、内容的にも質的にも非常にいい大会になったと事務局団体として、環境を愛してやまないという優しさで、その土地そのものの自然を大切に。助言者の下北野生生物研究所所長・森治氏と秋田県自然保護連合代表・奥村清明氏には、その的確な助言に対して深く謝意を述べたい。

今回事務局団体を引き受けて、大会開催のすべての事務的業務を担当したが、その中で青森県内の各自然保護団体と実行委員会は結成することが大変難しかったという。実行委員会には実質4団体しか結集出来なかった。

第3は、参加者の確定とその把握。加えて参加者は、この大会が「東北地方全体」をシフトしていることを考えれば、少なくとも事務局が「元」の「岩木山を考える会」会員の参加が多少あつたかである。

な、二日間をとおして協議の司会は一青森の自然を守る連絡会議代表で、博氏は幹事藤龍雄氏が述べた。参加者数も延べに90名を越えた。この参加者数からいえる。会になったととらえてい

行政やマスコミの関心も高く、弘前市はじめ各マスコミの後援（名義）をいただき、さらに弘前市長の歓迎挨拶もいただいた。また、地元紙には大会の案内も掲載された。日報、陸奥新報、デリ東北（こちらは17日午後）の取材（正午のニュースで放映された）があり、

東北自然保護の集い 岩木山大
～水辺の保全と自然林の再生～

「事例報告と協議の記録文」は9月22日に発送した。記録員竹浪氏の全面的な協力を得た。講演「岩木山の自然から一種の多様性と保全」は膨大なので会報では紹介出来ないが本会で読むべし。紹介しているのでほむなりお、ホームページを見れば簡単に次のまゝとして報告する。

東北自然保護
-水辺の保全



「事例報告と協議の記録文」は9月22日に発送した。記録員竹浪氏の全面的な協力を得た。講演「岩木山の自然から一種の多様性と保全」は膨大なので会報では紹介出来ないが本会で読むべし。紹介しているのでほむなりお、ホームページを見れば簡単に次のまゝとして報告する。

1. 地球環境保全と自然保護は人類にとつて緊急の課題。危機はすべて人類がみずから招いたもの。人間の叡知こそ救い。
2. 弥生時代以来、日本人は凶暴化してきた。
3. 岩木山は新しい火山。1863年が最近の噴火。狭さと火山の影響で生物の数も少ない。
4. 岩木山は独立峰、頂上に行くほど、固体数も少なくなる。
5. 自然界はモデル実験とか、シミュレーションにだけ頼る研究ではとても把握することは出来ない。
6. 生物には地方によつて変異があり、その変異が遺伝子の多様性を支えている。生物はその地方の天候、土壌などの条件によつて、それにもっとも適した遺伝子を自然選択してきた。ブ

保全と自然林の再生」のアピールいたします。

大会に関わる決算報告

収入の部

・大会参加費 544,500円
・大会宿泊・交流会 522,500円
・交流会のみ 48名 480円
・日帰り参加費 6名 300円
・寄付 25名 1,200円
・栗駒の自然を守る会 2,200円
・岩木山を考える会 5,000円
・岩木山を考える会事務局長阿部東氏 10,000円
・岩木山を考える会事務局長三浦章男氏書籍販売収入 7,000円

支出の部

・宿泊・交流会・会場費 460,145円
・印刷費・用紙代・名札ケース代・封筒代 148,110円
・内訳（実行委員会資料2回分・大会開催要項・大会案内・大会資料用封筒角2号など） 28,720円
・通信費
・内訳（実行委員会案内x2回分・大会開催要項・大会案内送付・大会終了後の資料送付・事例報告と協議の記録集送付）

この結果、総額92,475円の赤字となった。幹事会で前もってこの大会に100,000円の補助を決定していたので赤字分の詳細について会計監査の土岐修平氏の監査を受け、了承を得た上で補填した。

補填分92,475円の内訳

・「岩木山の自然から一種の多様性と保全」冊子代 24,000円
・交流会に津軽の地酒代 24,000円
・各種資料印刷代・用紙代 63,477円
・792円

大会その他について

本大会のことについて助言者をして下さった奥村清明氏は「秋田県自然保護団体連合の連絡報」で次のように報告している。

る。その冒頭部分を紹介する。

「主管は「岩木山を考える会」。この会はいまでは青森県内で質量ともに最も力のある自然保護団体である。6年前、鯉ヶ沢で開かれた第21回東北自然保護の集いでは「コクド」による鯉ヶ沢スキー場建設のため、貴重な岩木山のブナが伐採されるという問題が出ていて、「岩木山を考える会」がその会場で訴えようとした。この東北自然保護の集いを、その時だけある目的で利用し、後は参加しませんでした。人も多いが、それでは、今回の集いの意味は薄れてしまう。」

今回の集いの盛況は「岩木山を考える会」の努力によるところが大きい。参加要請は数百通近く出したという。そのうちかなりの数が、宛て先不明で返されてきたというから、自然保護団体の消長も激しいことがわかる。

「東北自然保護の集い」はゆるやかな交流の場であり、お互いに交流するなかで、お互いに元気をいただき、自分たちの次の活動につなげていくための場でもある。政党や労働組合のような決議や方針によるしぼりはない。各県持ち回りという方式は毎年、その県のカラが集いに出ておもしろい。今回の集いでは青森県の抱える自然保護の問題がズバリと提出されてとても勉強になった。」

第13回写真展「私の岩木山」の報告

日程： 9月29日（金）～10月1日（日）
場所： NHK弘前放送会館ギャラリー

写真展「私の岩木山」を、写真の「技術的・質的」なことに関なく「あなたの心の岩木山」を写真で表現し、お互いが「また鑑賞者お互いがそれぞれ心の岩木山風景を共有したい」ということを目的とし、市民参加型の写真展と位置づけ、開催した。その第十三回写真展も無事終わった。今回の特徴は何と出展者は一般からの出展者が多かった（会員外）のは21点、33%を占めた。作品総数60点で一般の方のもののは21点、33%を占めた。

東奥日報

2006年(平成18年)9月30日 土曜日



◆写真展「私の岩木山」 十月一日まで、弘前市下白銀町のNHKギャラリーで写真展。
市民団体・岩木山を考える会(阿部東会長)が主催する十三回目の写真展。それぞれの心の岩木山風景を共有しようという目的で企画し、会員や一般参加者の約七十点を展示している。
津軽一円から見た四季折々の岩木山の姿や、登山者、お山参詣の人々、希少になった植物、イヌワシなど、岩木山の自然が写し出されている。

それだけでなく「私の岩木山」を共有しあうという開催の趣旨が生きてくるためには次のことが条件となるだろう。
1. 多くの人が出展する。2. 多くの岩木山に関わる対象表現(多くの撮影地と対象物)。3. 多くの来場者。
岩木山の遠景写真が一番多かったが、それも撮影地の違い、季節や時間の違い、切り取り方の違いなど色々な写真であった。それは100人いるとその100人の中には100の岩木山があることを示していた。
その他に、岩木山と人々との関わりを主題とした「お山参詣」の写真も2人の方が出展した。例年、「岩木山と人々」が少ないので心配していたがこれで救われた感じがした。
なお、来場者総数は450名となった。聞くとところによると、同じ9月29日、10月1日という日程で弘前市内で、他に3ヶ所写真展を開催していたそうである。
本会場NHKギャラリーの向かい、弘前市民文化センターでもイトーヨーカ堂カルチャーセンター「写真教室の写真展を開いて、」そこで講師をして、楽しそうに展示し、本場にみないユニークなものです。写真展ですね。普通の写真展では見られないこの写真展期間中に会員になった方は3名である。

一般参加者の作品

・弘前市の太田さん作品・44年ぶりの懐かしさがこもる。



・つがる市の鳴海さんの作品。鶴の舞橋橋梁越しの岩木山。



弥生スキー場予定地跡地を未来への贈り物に その活用方法を考える住民集いの報告

「弥生スキー場跡地問題を考える市民ネットワーク」で開催。

日程：10月28日(土) 13:30~15:30

場所：青森県武道館大会議室 参加者：30名

事前に関心を持って参加した方が、会場には30名。紙に別に関心がないわけではなく、参加は非常に少なかった。多かっただろうと理解している。詳しく報告するので紙上で協議に参加していただくことを期待したい。

・報告：「弥生スキー場跡地の現状をどう見るか」(敬称略)

(岩木山を考える会)

・パネルデイスカッション

・コーデイナーター 今泉昌一

(弘前市を考える会)

・野田千恵 (コープあおもり)

石田豪

(弘前市会議員)

・竹谷マツ子

(弘前市会議員)

(岩木山をる会)

・まとも

須藤宏

(市民が主人公のみんなの会)

「弥生スキー場跡地の現状をどう見るか」

・画像を用いて、現在のスキー場の造成のための森林伐採直後の様子と比較して、現在、植生の様子の違い、解説をした。スキー場の造成に伐採された土地の雑木林と伐採地の違い、オートキャンプ場の植生などの説明、伐採地の自然に成長してきた樹木との樹勢の違い、非常な違和感のある光景などが示され、今後の跡地の利用法へ

市民の財源としての立場から

野田千恵

・国の財政がとて中絶している折、税金の無駄遣いと

・もたれに型点施設が中止となつて良かつた。我々が子ども

・ない空気に残さなければならぬのは、豊かな自然と汚れてい

・現地住民の立場から、弥生跡地は今の自然のままが一番良い。石田豪

・は、百沢桜林の近くに住んでいる農家として発言したい。桜林の朝

・この計画に真向から反対し、ストロブに追い込んだ土器が出土

・し、二ホンザリガニも1000匹もとれた。要は弘前

・市は、弥生跡地のほろい、弥生跡地のほろい、弥生跡地のほろい

・う、という点では、有用な活用が第一。ブナは高い木で、植

・下、という点では、有用な活用が第一。ブナは高い木で、植

・め、という点では、有用な活用が第一。ブナは高い木で、植

・い、という点では、有用な活用が第一。ブナは高い木で、植

・農、女性性の立場から、地元で育った。春の雪解けの形を見て、種

・新、法師で生まれ、地元に育った。春の雪解けの形を見て、種

・中、戦後、栄養失調にならなかつたのは、岩木山の山の恵。母は

山菜を食べ、103歳まで生きた。スキー場開発が挫折し、その

・自然保護の立場から、次の点を考えてほしい。それが出

・(1)環境アセスメント、次の点を考えてほしい。それが出

・(2)里山としての自然の回復力を重視してほしい。弥生いこいの広

・(3)景観を傷つけないものであつてほしい。弥生いこいの広

・場の赤い屋根は違和感がある。必要以上には、必要以上の

・性、弥生跡地の開発計画は、必要以上には、必要以上の

・施設、弥生跡地の開発計画は、必要以上には、必要以上の

・市、弥生跡地の開発計画は、必要以上には、必要以上の

・た、弥生跡地の開発計画は、必要以上には、必要以上の

・と、弥生跡地の開発計画は、必要以上には、必要以上の

・自由、弥生跡地の開発計画は、必要以上には、必要以上の

・(1)教育、弥生跡地の開発計画は、必要以上には、必要以上の

・(2)環境、弥生跡地の開発計画は、必要以上には、必要以上の

・(3)自然、弥生跡地の開発計画は、必要以上には、必要以上の

・(4)社会、弥生跡地の開発計画は、必要以上には、必要以上の

・(5)経済、弥生跡地の開発計画は、必要以上には、必要以上の

・(6)文化、弥生跡地の開発計画は、必要以上には、必要以上の

・(7)環境、弥生跡地の開発計画は、必要以上には、必要以上の

・(8)社会、弥生跡地の開発計画は、必要以上には、必要以上の

・(9)経済、弥生跡地の開発計画は、必要以上には、必要以上の

・(10)文化、弥生跡地の開発計画は、必要以上には、必要以上の

・(11)環境、弥生跡地の開発計画は、必要以上には、必要以上の

・(12)社会、弥生跡地の開発計画は、必要以上には、必要以上の

検証の姿勢が大事ではないか。山はこのまま残していきたいものだ。(野田)

地元の方々がいかに施設に期待したか。今後はソフト面を中心に活性化させることを話し合っていくことになる。(石田)

やっぱりのまま残すのが一番いいのかなと思った。長い目で自然に帰るのが一番いい。(竹谷)

金のかかるアセスメントは要求しない。市民の手によって環境調査をした。自然に親しみながらの観察会は出来る。ゴミ拾いなどもボランティアで出来る。行政と共に、「岩木」という名前が残るような取り組みを今後進めていきたい。(三浦)

まとめ

・岩木の人たちの思いが述べられ、また振興を考えたいという声も紹介してもらい、良い集会となった。

・市民レベルで考える場所と機会を是非、弘前市は検討してほしい。

・農村振興という名の下に、自然を破壊する大型開発をばらまいてきたことは反省すべきだ。

・自然の恵みを大事にすること。それが岩木山の価値を全国に広め、この地域が活性化することにつながるのではないのか。こうした視点で施策を考えていくのではない。

特別展示「岩木山の野鳥」展開催の案内

本会では市民の方々に岩木山により深い関心を持つてもらうために特別展として昨年はゼフィルス展(岩木山の蝶)を、昨年は青森のトンボ展を開催してきました。三年目の今年は会員でありかつ弘前野鳥の会のメンバーでもある飛鳥さん、菊地さん、土岐さんなどが中心になり次の日程等で「岩木山の野鳥」展を開催します。

日程：3月16日(金)～18日(日)
場所：NHK弘前放送会館ギャラリー
開始：午前10時 終了：午後5時
なお、詳細は2月末発行の会報次号でお知らせします。

「遺伝子組み換え植物の恐怖」自然保護の視点から考えるつと案内

東北自然保護の集い・大会アピールで「農業・漁業・林業」など第一次産業としつかり向き合っていくことが肝要」と提唱したように、本会としては「遺伝子組み換え」問題についてもしっかりと向き合っていきたい考えです。

このたびは津軽農民組合が「遺伝子組み換え植物の恐怖」というDVD上映会と談話会を次の日程等で開催しますので多くの会員の参加をお願いします。

日程：2007年1月25日(木)：18時から20時まで
場所：津軽保健生活協本部2Fホール(コープあおもり和徳店)
資料代：400円 談話・交流会費：600円(飲み物持参大歓迎)

事務局から

・林野庁による国有天然林破壊を告発するという署名依頼が「日本の天然林を救う全国連絡会議」の河野昭一京大名誉教授から来ております。正木前会長からも同様の案内がありました。署名用紙を会報次号に同封いたします。よろしくお願いします。

・タウン誌「月刊弘前」表紙写真野鳥シリーズが12月号をもって終了しました。大好評でした。飛鳥さん、菊地さん、あきさんがご協力しました。なお、2007年は鳥以外の「岩木山の生きもの」シリーズが始まり、本会が担当します。

・六月以降の活動日誌は次号または総会経過報告に掲載予定。

編集後記

・東北自然保護の集い、何とか「成功裏」に終わることが出来て(?)ほっとしているいとまもなく「弥生跡地観察と見学会」(通算4回目)、第十三回写真展「私の岩木山」シンポジウム「弥生跡地をどうするか」の開催が続いた。その報告を兼ねて会報四十号を十一月には発行しようと考えていた。ところがその後虚脱状態が続き、12月になってしまった。人間ほどほどに忙しいのはいいが過ぎると大休止が必要らしい。

・昨冬本会の反対を無視して始めた岳の雪上車運行、今年はやらないそう。客が少なく商売にならないのが理由らしい。そのためにかなり、木を切ったのだが、木は元通りにはならないよ。どうしてくれるの。(M)

会報「岩木山を考える」第四十号(二〇〇六年十二月二十日発行)
発行：岩木山を考える会・会長 阿部東・事務局 長三浦章男・事務局
〒〇三六二八〇五四・弘前市田町四一・二一七
TEL 〇一七二・三五・六八一九 *郵便振込口座番号 〇二三八〇一
〇一三七九一四 *振り込み先 岩木山を考える会